出　土　遺　物

本遺跡は、尨大な量の縄文時代遺物が包含されていることは、周知のとおりであり、今回の調査でも、土器片のみで、平ケース（約20ℓ入り）30箱を数えるに至った。その埋蔵量の甚しく多いことがうかがえよう。

(1)　住居跡出土遺物

3基の住居跡からは、ほぼ復原できた土器（口縁部のみ）1個及び多数の土器破片が出土した。ここでは、それのうち、明らかに上層からの混入と見られる後期以降の土器は、意図的に除外した。以後、各住居跡ごとに説明することにする。

第1号住居跡出土の土器（第8図）

1～5は、阿玉台式及び勝坂式土器に属するもので、角押文や刺突文がみられる。1、3は口縁部内側に稜線がめぐる。また、1、2の隆起線は断面が三角形である。5には撚糸文が地文として認められる。

6～23は、加曽利E式土器である。6～11は地文が撚糸文、12～20は縄文、21は隆帯の土器であるが地文は不明、22は地文が条線、23は無文である。6は、キャリパー状の口縁部をもつ深鉢形土器の口縁部であり、2本一組の隆起線が、巻き込むような形で貼付されている。7、9、10は弧線文系の土器である。12は、隆起線文が横に走っている。古い土器である。13、18～20は、加曽利E式土器としてよいであろう。この住居跡内の土器の中では、最も新しいものである。阿玉台、勝坂式土器とともに、混入かも知れない。

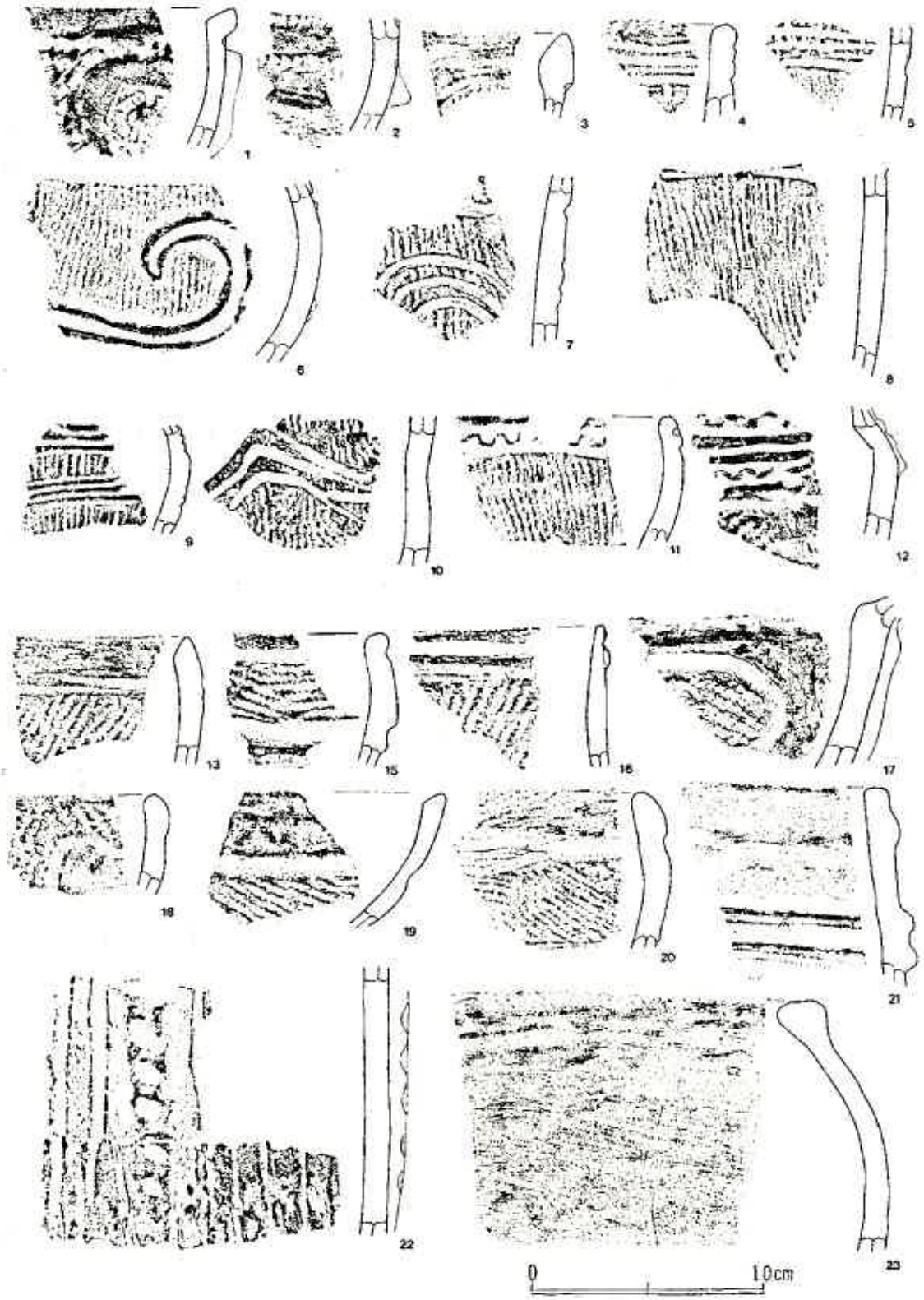
以上のことからこの住居跡の時期は、加曽利EⅠ式土器の時期として捉えるべきであろう。

第2号住居跡出土の土器（第9図）

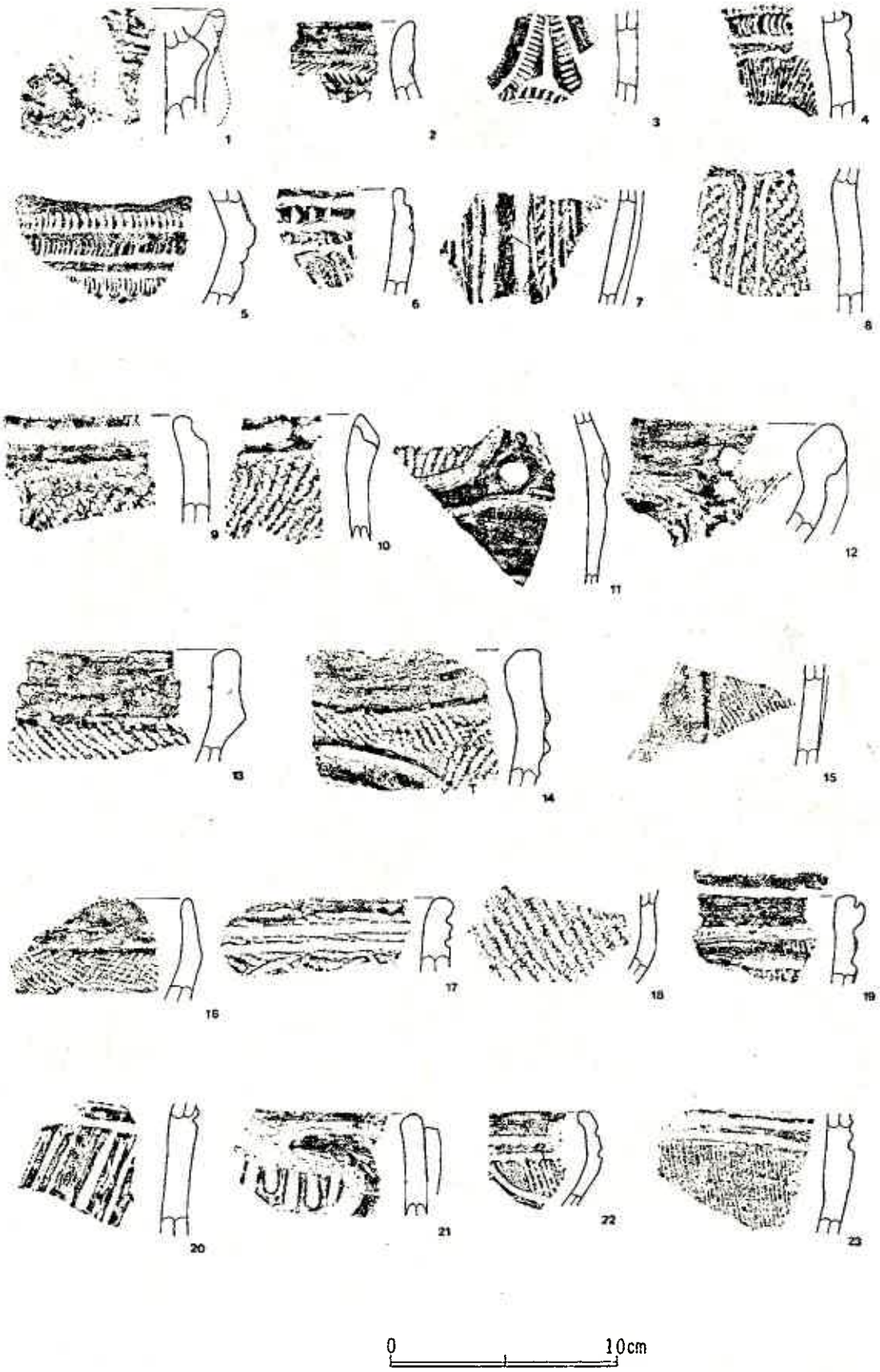
1～7は、阿玉台式及び勝坂式土器である。2には矢羽状の刺突が見られる。

8以降は、加曽利E式土器である。8～18は地文が縄文、19、20は地文が撚糸文、21、23は地文が条線である。13～16には、微隆起線が見られ、加曽利E式土器の最も新しいものと言えよう。22は弧線文系の土器である。

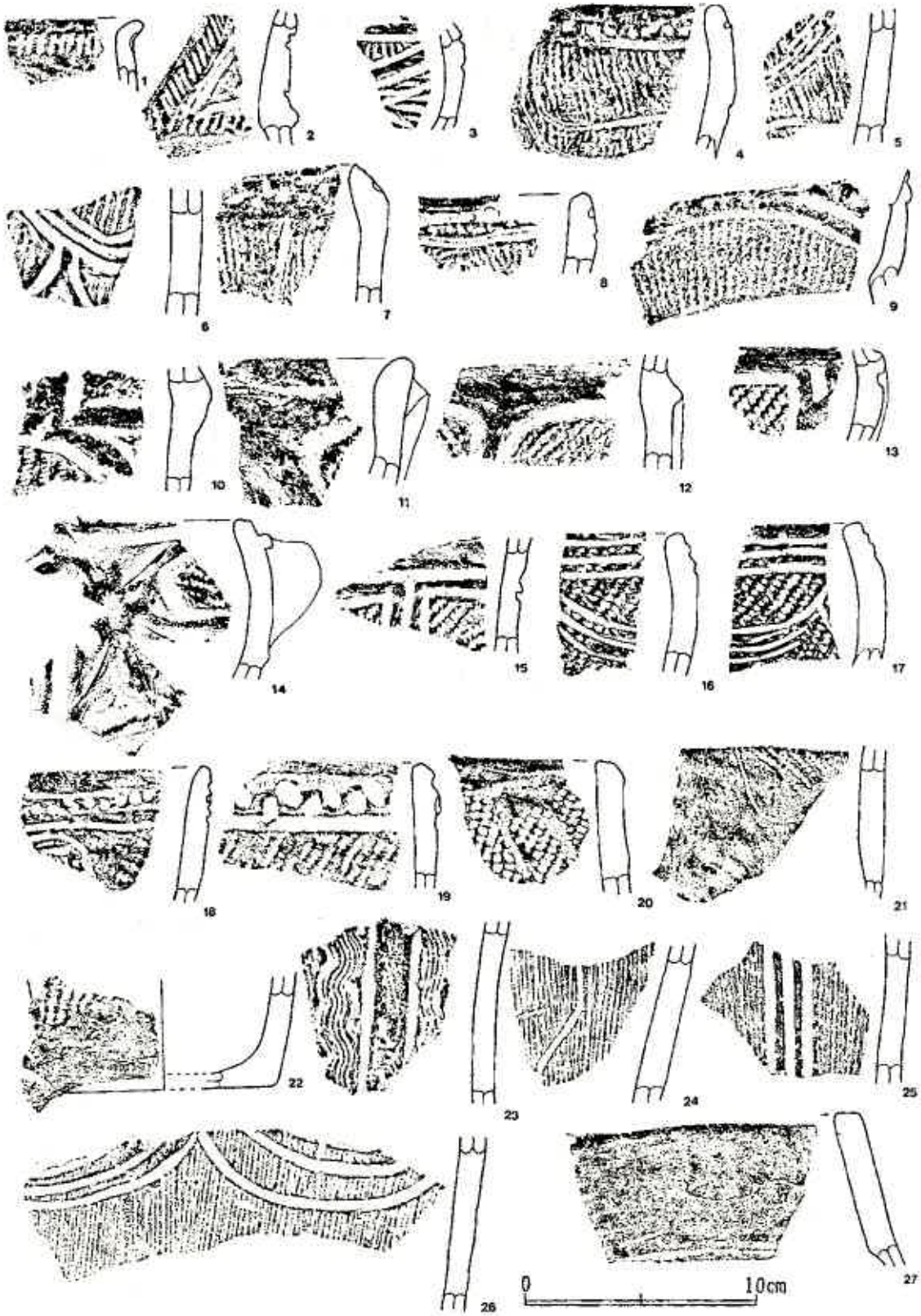
この住居跡の土器もいろいろ混じっているが、加曽利E式の最終末期が、住居跡の



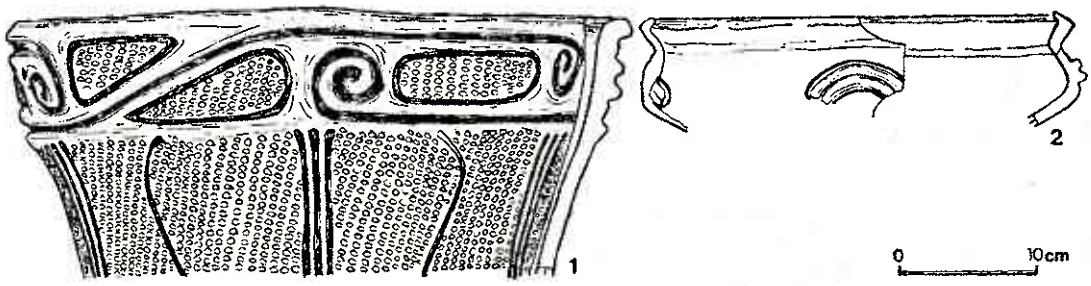
第８図　第１号住居跡出土土器拓影図



第９図　第２号住居跡出土土器拓影図



第10図　第３号住居跡出土土器拓影図



第11図　第３号住居跡出土土器実測図

土器かも知れない。第１号にも第３号にもその時期の土器はなく、第２号が第１号を切っていることからも考えられよう。

第３号住居跡出土の土器（第10、11図）

第10図１～３は、阿玉台式及び勝坂式土器、４以降及び第11図は加曽利Ｅ式土器である。第10図４～９は、地文が撚糸文、10～22は、地文が縄文、23～26は、地文が条線文、27は無文である。10～14は、口縁部に横長の隆起線による区画が見られる。16、17、26は弧線文系の土器である。

第11図１は、口縁部付近が復原できたもので、約５分の１周を欠く。キャリパー状口縁部をもつ深鉢形土器であるが、口縁は余り内湾しない。大型の土器で、口径54*cm*にも及ぶ。厚さも1.5*cm*ほどある。口縁部文様帯は、横長の楕円形と三角形の区画、それに渦巻となり、隆帯で区画を作っている。隆帯の土器面に接するところは、かなりなだらかであり、区画内は、指頭による浅い幅広の沈線が、隆帯の裾をめぐる。区画内には、粒の大きな縄文が押捺されている。なお口縁部文様帯は、３単位を基本としているものの、区画１つが余ってしまう。胴部は、渦巻直下で３条の沈線が、その中間で、大きく蛇行する１条の沈線が懸垂する。地文は縄文である。焼成良く、固く、滑沢のある土器で、内側は、よく磨かれている。部分的にはススが付着しているが、全体的には茶褐色を呈する。加曽利ＥⅠ式土器でもやや新しい時期に入ろう。

２は、浅鉢形土器の大破片である。頸部及び胴部が「く」の字状に折れる。地文は無文で４か所に２本１組の弧状の隆起線が付く。なお、口唇部内側は突き出す。全体的に茶褐色を呈するが、口縁部と隆起線上に丹彩が見られる。整形、焼成は良く、外面はなめらかで、光沢があるが、内面はやや荒れている。加曽利ＥⅠ式土器としてよ

いであろう。

（2） 埋甕関係（第35図）

1は大型の深鉢形土器の底部から胴部下位にかけての破片で、地文は細かい縄文で、隆起線とその裾を刻む角押文、それを囲む波状の沈線などが見られる。茶褐色を呈する。2も大型の深鉢形土器の胴部破片で、断面三角形の隆起線が三角形の区画などを作り、その裾に1と同様、幅広の角押文が施される。細い波状の沈線も見られる。黒ずんだ茶褐色を呈する。3は中型の深鉢形土器で、断面に三角形に近い隆起線が横位ないし縦位に付され、随所にX字状文を作る。区画内に、角押文や波状の沈線が見られる。胎土に少し雲母を含む。器壁は荒れており、外面は茶褐色、内面はススが付着し黒ずんでいる。

1、2の土器は、中部山岳地方の編年で言えば、藤内I式とされるものであり、3は阿玉台式土器と呼んでしまえばそれまでであるが、いくぶん矢羽状に近い角押文や波状の沈線文など勝坂式土器の影響をすでに受けている。

（3） 包含層出土の土器

第1類土器（第12図）

縄文時代中期中葉の阿玉台式土器及び勝坂式土器とされるものである。1～8は阿玉台式土器としてよいであろう。それに以降は、勝坂式土器の範ちゅうに入れられようが、細分すれば、いろいろと問題が出てくる。11・12は矢羽状の刺突が顕著であり、新道式土器の特徴を持っている。

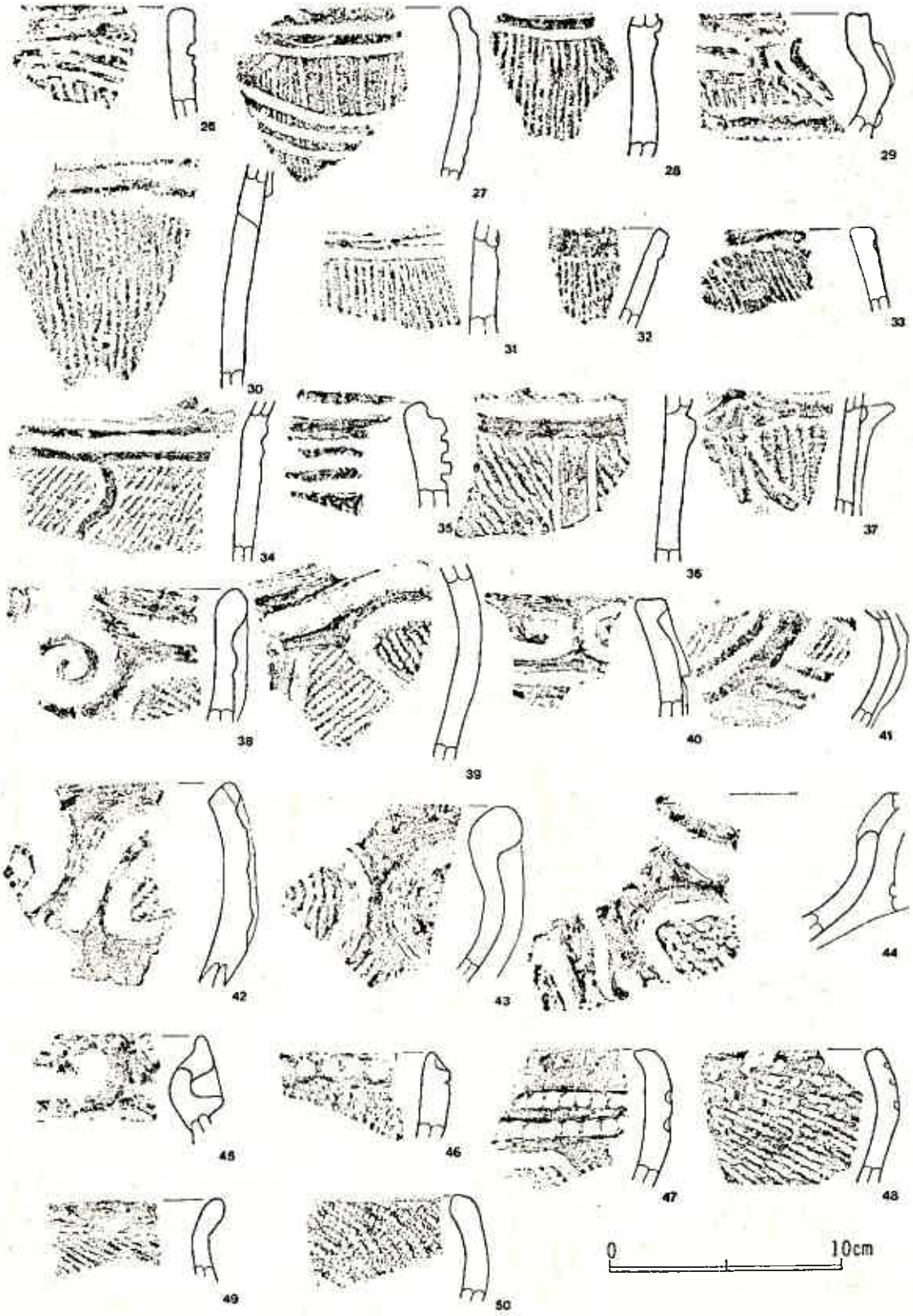
第2類土器（第13、14図）

縄文時代中期後半の加曽利E式土器とされるものを一括した。

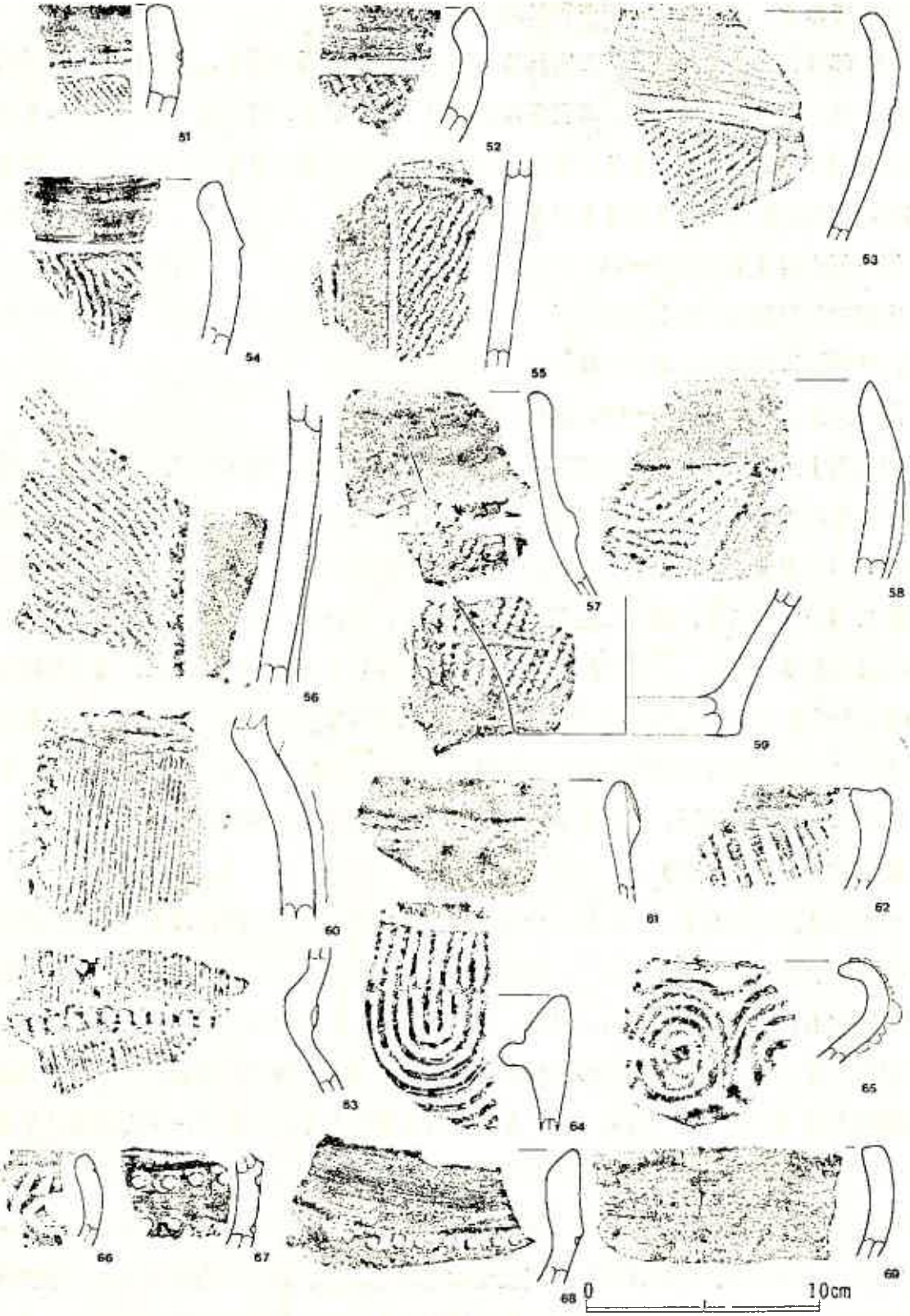
26～33は、地文を撚糸文をもつもの、60～63は、地文を縄文とするもの、60～63は、地文を条線文とするもの、64以降は、渦文（沈線と隆線）、円管文それに無文のものである。

26、27は、いわゆる弧線文系の土器である。29、35、38～45は、口縁部に区画や渦文が見られるものである。46～48、51は、地文の縄文のほかに円管文が見られる。52～55は、縄文部と無文部の区画に太く浅い沈線を用いるものである。加曽利EⅢ式と呼ばれるものである。56～58、61、68は、施文部と無文部の境界に微隆起線が見られ

第12図　包含層出土土器拓影図(1)



第13図　包含層出土土器拓影図(2)



第14図　包含層出土土器拓影図(3)

るものである。最も新しい加曽利E式土器である。

60、63は、内湾する口縁部と膨れる胴部をもつ深鉢形土器で、条線の上に連続刺突のある隆線を貼付している。曽利系の土器である。64は、口縁部の内側が著しく突出し、内側に鍔が付く形になる。中部山岳地方や北陸地方に多く見られる手法である。65は、胴部に縄文が付されるものと考えられる。（青木）

第3類土器（第15図70～74）

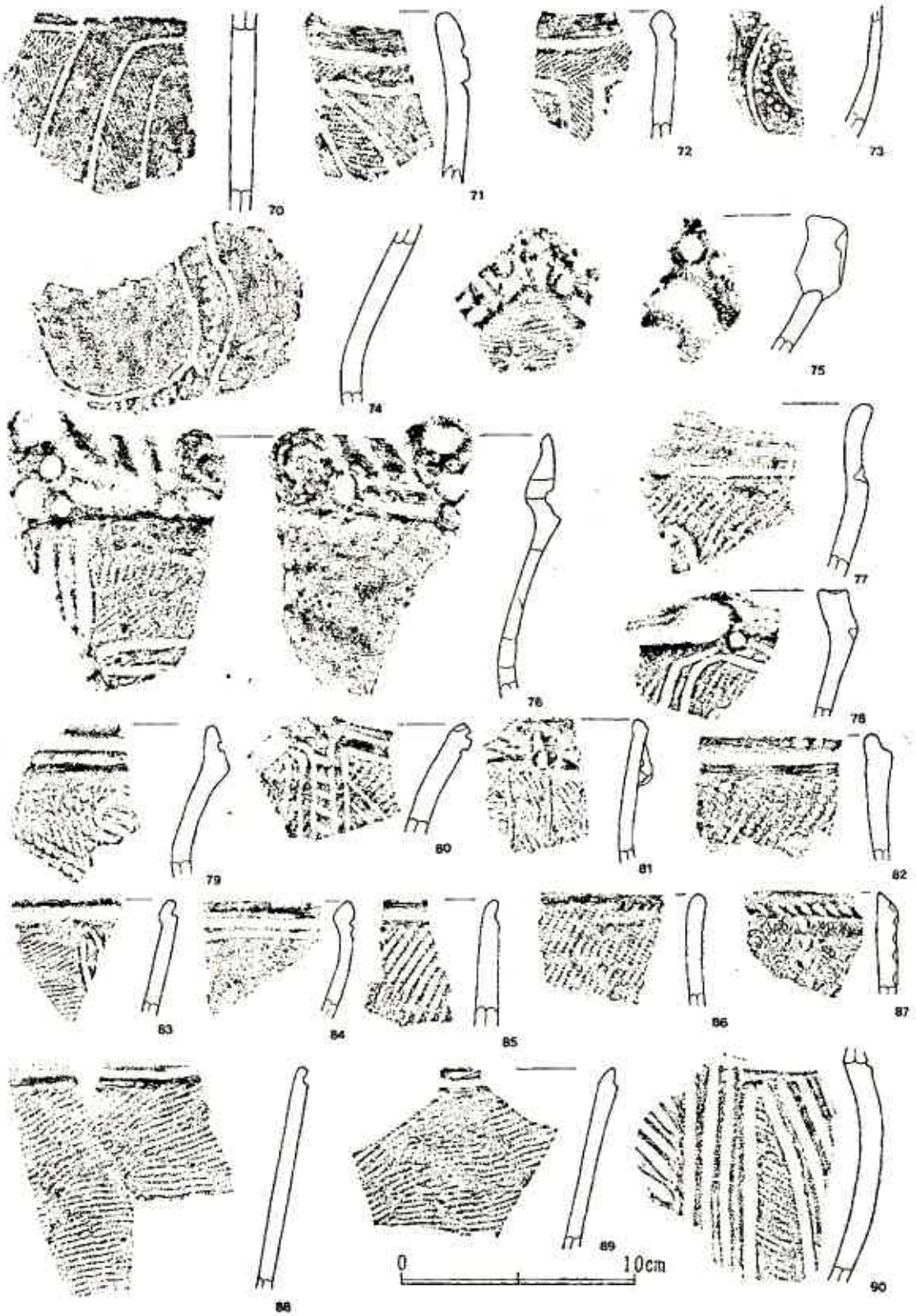
本類は後期初頭の称名寺式土器である。いずれも沈線により文様を描くものであるが、沈線間には縄文、あるいは列点が施される。

第4類土器（第15図75～90、第16、17図）

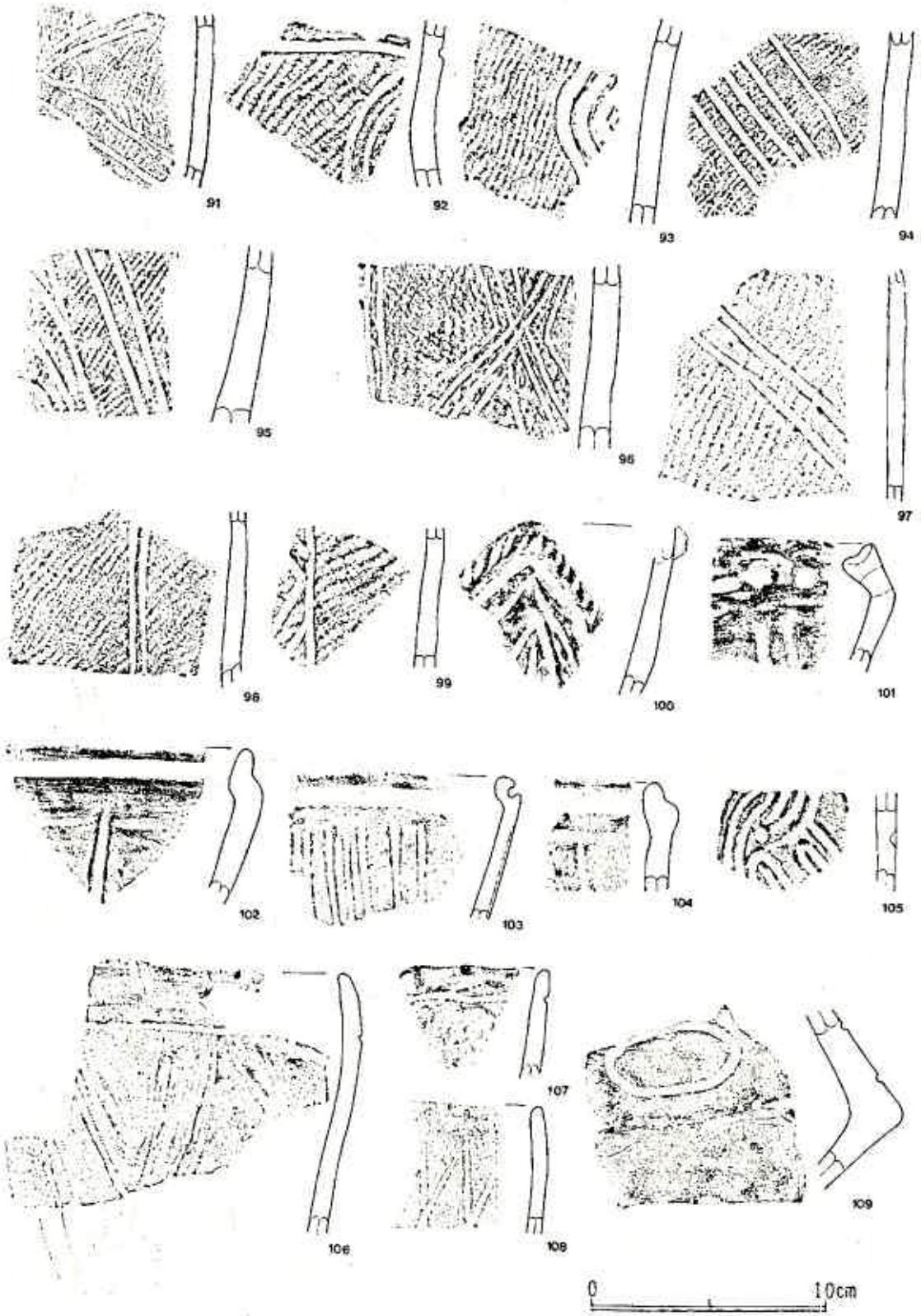
堀之内Ⅰ式土器をもって本類とする。器形は、やや外反気味に口縁が開く深鉢形を呈するものが多いが、口唇部が「く」の字状に内向するものや、口縁付近で若干内傾するものなどが見られる。また、109のように胴部が張る器形を呈するものもある。文様について見ると、地文に縄文を持つものと、持たないもの2種類があるが、どちらも沈線あるいは刺突、粘土貼付などが施されている。75～99は地文に縄文を持つもので、86を除き地文上にさまざまな文様が施文されている。76は口唇上に粘土紐が撚り合わされた状態で貼付される。100～117は地文に縄文を持たない土器で、109を除き該期に一般的な器形、文様をもつ。118～124は底部で、網代等がみられる。

第5類土器（第18図）

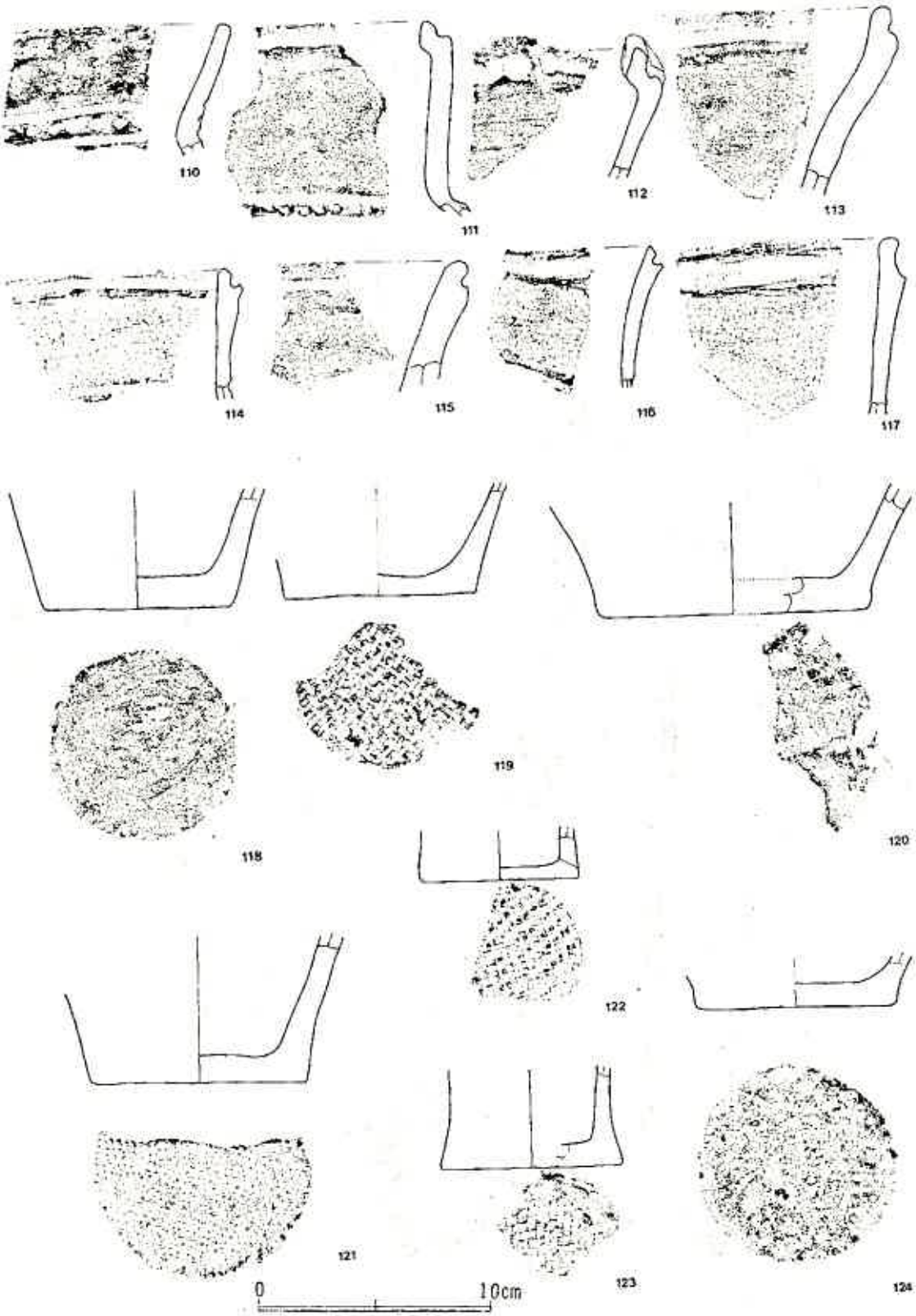
堀之内Ⅱ式土器をもって本類とする。器形は129～131、141のほかは外反しつつ開く深鉢形を呈すると思われる。文様の描出方法は大きく見ると2種類有り、1つは地文の縄文上に沈線を施すもの、(133、135)、もう1つには地文の縄文上を平行沈線で区画し、その外を磨消するもの（125～128、131、137～140)、もしくは平行な沈線間に縄文を充填するもの（129、136）と言うように幾何学的なモチーフを縄文帯で構成するものである。126、132、134～136、139～140は口縁部に刻みの入る隆帯を貼付している。134は隆帯上に8の字状の粘土貼付が配される。125、137は同様のモチーフを持つものである、外面は沈線と縄文で文様が描かれ、口縁部内面に沈線と連弧状の文様が描かれている。142は内面に沈線間に施した刻みを数段配するもので、器形は浅鉢形を呈すると思われる。131は橋状の把手を有する口縁部破片で、器形は注口土



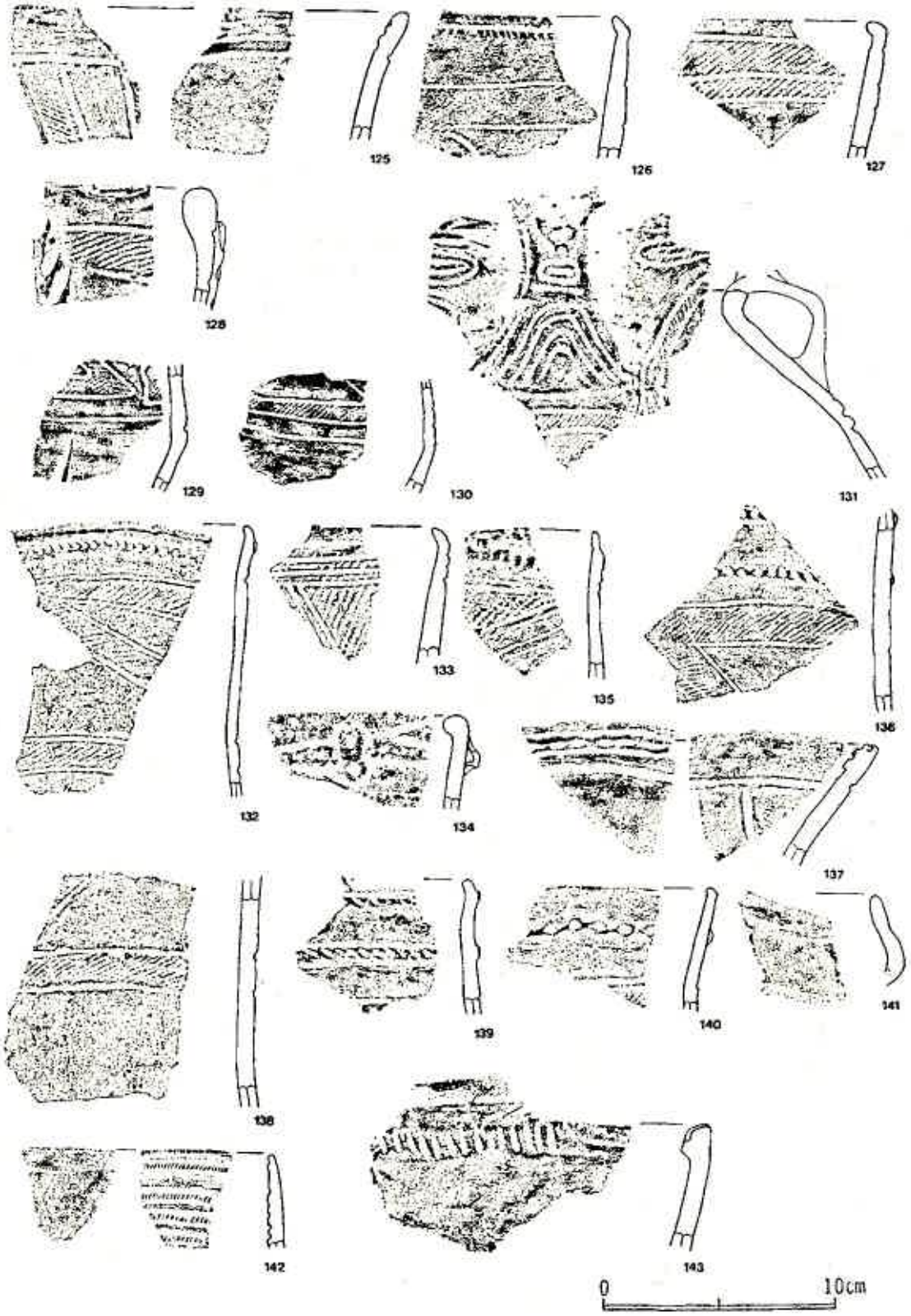
第15図　包含層出土土器拓影図(4)



第16図　包含層出土土器拓影図(5)



第17図　包含層出土土器拓影図(6)



第18図　包含層出土土器拓影図(7)

器かと思われる。134、143を除き整形は丁寧である。　（中村）

第６類土器（第19～24図）

加曽利Ｂ式土器を一括して本類とする。加曽利Ｂ式はⅠ～Ⅲまでに分類されているが、ここでは、精製土器と粗製土器とに分けて各式をまとめて説明することにする。

第19図～第21図、第22図198～205、207、213～217、第25図260及び第37図６・７は精製土器である。暗褐色ないし黒褐色を呈し、滑沢がある。器形は平縁及び波状の口縁部をもつ深鉢形土器が大部分である。地文が無文のもの、縄文のもの、縄文と条線文のもの、条線文のものなどがある。174は、口縁部内側に数条の沈線が横走し、その間を刻んでいる。加曽利ＢⅠ式とＢⅡ式土器の厳密な分類は困難であるが、横走する沈線が平行のものなどは古く加曽利ＢⅠ式土器、沈線が弧を描いたりしているもの、条線文が見られるものは、同ＢⅡ式土器としてよいであろう。186は、同ＢⅢ式土器に見られる典型的な深鉢形土器である。最大径のところに稜が見られる。

215、216は、異形台付土器と思われる。また260は注口土器であろう。

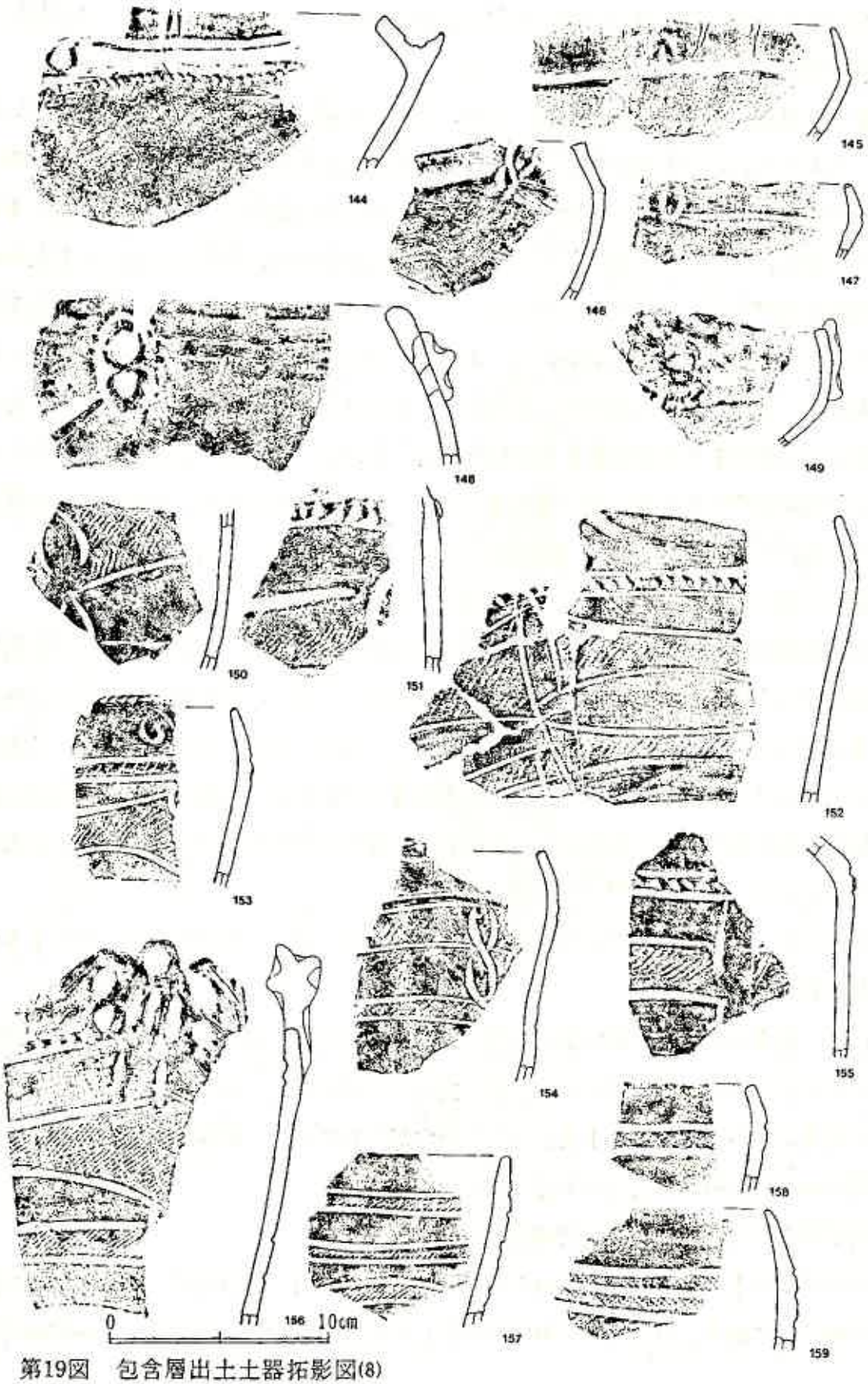
第22図208～212、第23図、第24図243～255及び第37図８は、粗製土器である。粗製土器は型式分類がなお難しい。深鉢形土器で、やや大きめの器形で、口縁部は、外反するもの、内傾するもの、直立するものがあり、口縁に沿って連続指圧痕がある太い隆起線が貼付されるものが多い。隆起線も２条になるもの、胴部のくびれ部に隆起線が貼付されるもの、その他がある。また、口縁部内側にも１条（まれに２条）の太い沈線がめぐるものが多い。

第24図208～212は、格子目の条線が見られる。これらは、加曽利ＢⅡ式土器とされるものである。

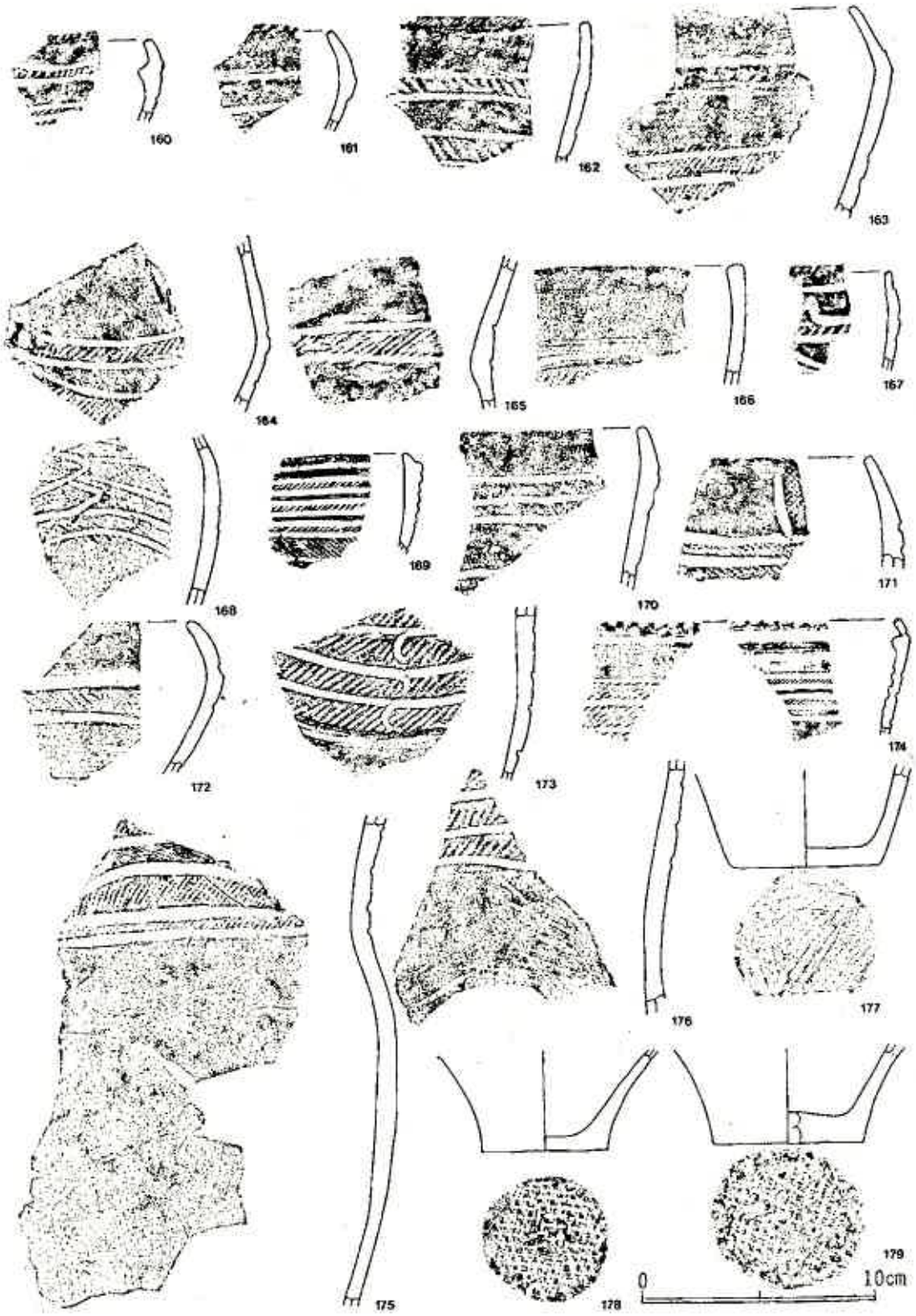
他は、縄文を地文としている。縄文は、押捺が浅い、縄文の上に太い沈線文が展開しているものが多い。第37図８は、堀之内式土器にごく近い文様構成であるが（　）状の沈線などから加曽利ＢⅠ式土器とした方が良いである。256～259は深鉢形土器の底部である。すべて網代痕のあるものである。　（青木）

第７類土器（261～347、第37図13、17）

本類は安行Ⅰ式土器と思われるものである。261～277、279～281、285、286は帯縄文系の土器であり、口縁はわずかに肥厚し、直立気味または、内傾する。一部に外反



第19図　包含層出土土器拓影図(8)



第20図　包含層出土土器拓影図(9)

第21図　包含層出土土器拓影図(00)